

「三井寺」を歩く

能「三井寺」の前半は京都清水寺が舞台です。音羽山清水寺の本尊は十一面千手千眼観世音菩薩。古くから観音信仰の古刹として多くの人々の信仰を集め、能「熊野」「田村」「盛久」などの舞台としても馴染みのあるお寺です。JR京都駅からは、市バスで「東山五条坂」停留所で下車し、松原通りの参道を十五分ほど上っていくと仁王門に着きます。京都で最も人気の高い観光名所のひとつでもあり、沢山のお土産物屋さんや軒を並べる参道は、観光シーズンを外れた平日でも、お祭りの縁日に屋台が並ぶような賑やかさでした。能「三井寺」のシテは我が子の行方を訪ね歩いた末に、清水寺観音で霊夢を授かるのですが、門前の宿の亭主（狂言）がシテの帰りが遅いのを心配して迎えに出たり、シテの霊夢を判じよう、言うあたりは今でもそんな気のいい亭主がひょっこりと顔を出しそうな雰囲気です。

さて、京都から滋賀県にはいる主な街道は、山中超え（志賀越えとも、北白川く大津市山中町経由）、逢坂関（三条蹴上経由、国道1号線）、途中超え（八瀬大原経由）の三つのルートがあります。清水寺を起点として三井寺に向かうならば四ノ宮河原から逢坂関（京都市山科区）を越えるルートが地理的には最も近いのですが、詞章をたどっていくと比叡山を越える志賀越えの道をとったことがわかります。山中を越え、滋賀県に入ると眼下には大きな琵琶湖（鴈の海）が広がります。詞章にも登場する「唐崎の松」から琵琶湖の東岸の「山田矢橋の渡せ船」（本公演のチラシの琵琶湖の写真は唐崎から山田矢橋を写しました）を見ながら三井寺に到着しました。

三井寺（長等山園城寺）は、滋賀県大津市の長等山中腹にある天台寺門宗の総本山です。天智・弘文・天武の三天皇の勅願寺として、天武天皇十五年（686）に建立されたといわれています。広大な境内の中でも特に眼をひく金堂は、慶長四年（1599）に豊臣秀吉の正室北政所によって再建されたもので、本尊の弥勒菩薩が安置されていますが秘仏のため公開されていません。境内はどこも水脈が豊かで金堂裏には霊泉も湧き出ています。また、「三井の晩鐘」で有名な大鐘は慶長七年（1602）に铸造再建され、「形の平等院、銘の神護寺、声の三井寺」の三銘鐘といわれ、音色のよい事で知られています。今回は鐘楼を守る川合敏夫氏に寺の縁起や鐘の事などを教えて頂くことができました。このあたりは土の質が違うので鐘の余韻が長く響くそうです。ために鐘をつかせて頂いた後に鐘の真下にしゃがみこむと、何とも云えない清らかな余韻に全身が包まれました。仲秋の名月の晩、金堂前の広場に集まった人々の耳にシテのつく鐘の音が静かに響き渡っていく様が自然に浮かんで参ります。決して身分の高いシテではありませんが、子を思う母の純粋な祈りが月の光と鐘の音に同化し、澄んだ秋の空に昇華していくような曲ではないでしょうか。

平成二十二年 長月吉日

廣田 幸稔



↑清水寺 観光客で賑わう本堂、参道  
→滋賀 唐崎の一つ松  
現在の松は3代目だがすでに樹齢は200年に及ぶ



←唐崎から琵琶湖対岸の山田矢橋を望む  
↓三井寺大門（仁王門）  
山門を入ると、長等山山腹に広がる広大な境内が続く



←鐘楼の中で川合氏の説明を聞く  
↓金堂（本堂） 右手は鐘楼  
鐘の音は山腹の境内から琵琶湖の湖面を渡り遠くまで響く

